牧会日誌

2023/5/6

西九州伝道所　佐々木正明

〇〇年〇月〇日

3 歳になったばかりの男の子の家族葬を行った。本葬は葬儀社において仏式で行ったが、「ま、いいか。」 キリスト教式の葬式をやらなければ、天の御国に入れないと聖書が教えているのなら、何が何でもキリスト教式でと戦うところだが。何しろ、親類のひとりが立派な勝利のクリスチャンになって、母親の葬式にも出ない、お盆も無視する、元旦の行事は不参加、地域の祭りごとにも絶対反対、宴会は拒否を貫いたために、親戚中でキリスト教はだめということになっている。この勝利のクリスチャンはその後家を出て、身体障害者の女性と結婚した立派な人。でも・・・・・一人の勝利のクリスチャンが出現すると、百人の日本人がキリスト教を嫌うようになってしまう。

葬式をした男の子の母親は、十六歳で「できちゃった結婚。」高校は中退させられた。彼女はまだ救われたかどうかという時に、妊娠。正式に結婚。でも若い父親がドラッグをやっていたために、離婚。親戚中が「堕せ」と大合唱。十六歳の母親は「絶対に産む」と譲らない。先に救われていた母親の母親も、絶対に産ませると決意。私も牧師として、「生まれたら、全力を尽くして生きて行けるようにしてあげるから、絶対に産むように。間違いを間違いで糊塗してはいけない」と指導。

おかげで仲の良かった母親の母親の父親、つまり曽祖父と大喧嘩。「顔も見たくないからもう来るな」と追い出されてしまった。ところが、無事生まれてしまうと、その可愛がりようは異常に近いと聞く。それで禁を犯して訪ねると、飲兵衛の彼はいつものように真っ赤な顔をしていたが、「こんなかわいい子を、俺は殺せと言った。申し訳ない」と、何回も畳に額をこすりつけて謝った。

それが電車にぶつかって、一週間後に死んだ。家族の嘆きよう、特に曾祖父の悲しみようはあまりにも哀れで、正視できなかった。仏式の葬儀には五百人以上の来会者があった。曾祖父の顔が広かったからだ。

〇〇年〇月〇日

あの曾祖父が召された。つまり三歳で亡くなった男の子の母親の母親の父が死んだ。八十三歳。長女がクリスチャンになって二十六年。このところすっかり弱っていたが、頑固は変わりなく、奥さんにはいつも当たり散らしていた。奥さんが青あざを作り、目の下を腫らしているのは日常茶飯事。いつかはろっ骨を折った。その彼が寝たきりになり、とうとう入退院のくり返し。最後に入院したときに、突然「洗礼を受けたい」と言い出した。最初は家族の誰も信じられなかった。でも本心だった。それで、少し具合が良くなったと退院したときに、奥さんと一緒に洗礼を授けた。もちろん滴礼である。でも「これで俺もひ孫のところに

行けるし、長女と同じところにも行ける」と大喜び。「奥様のことはどうなってるの？」と言いたいところだが、喜んでいる彼の姿に、奥さんも涙を流した。いつも友人と飲んで真っ赤な顔をしていたために、重篤になって飲めなくなるまで、話をまともに聞いてもらったためしはない。でも二十五年ほどは、福音を語り続けて来た。
　洗礼を授けて三カ月、今日は彼の家族葬。親戚の中の発言力の強い者が、今もキリスト教式の葬儀は絶対に許さないということで、争いごとの嫌いな私は、そっと、別に家族葬をやった。久しぶりに、三歳の男の子を亡くした母親にも会った。「息子が召されてから、教会に来るのをやめたけれど、クリスチャンを止めたわけではない。心の傷が癒えたら、またみんなと一緒に礼拝すると」言う。遠い沖縄で、一人で暮らしている。祖父に似て釣りが大好きで、よく舟で釣りに出て、大物を釣り上げている。

〇〇年〇月〇日
「ほとんど使ったことがない新しいお墓を、引っ越して行った友人にもらって、自由にしていいからと言われているんだけど、先生、いらないですか？」
　母親の母親が言ってきた。「自分の家のお墓の背中合わせで、小高い山の上の林の中のいい環境だ」、ということで見に行った。二区画分で、一区画年間五千円の管理料だけ。両親のためお墓を建てたはいいが、自分たちは大阪に家を買って住むようになったので、「両親のお骨も大阪に持って行くから」ということらしい。

〇〇年〇月〇日
　仏教式のお墓の石を取り換えて、キリスト教式のお墓に造り直してもらった。海外産の御影石を買った方が、日本で削り直すよりも安いということで、計二十万円。新しく作る十分の一以下でできた。ここに入る必要がある信徒は今のところ、二名。でもまだ若い。順番からいうと、我々牧師夫婦が最初か！　「お墓は、地方の伝道には絶対に必要」という、先輩や信徒たちの意見を入れたが、悪くないと思う。

〇〇年〇月〇日
　一年と少し前に家族葬をやった飲兵衛の、三女の葬式に出た。つまり母親の母親の一番下の妹。洗礼を授けて三カ月。今回も仏式の葬式だったが、彼女が洗礼を受けたのは、親戚の多くには知られていた。参列していた長女、つまり最初に亡くなった三歳の男の子の祖母は、葬儀の後、「私の葬式は絶対キリスト教でやるようにして見せる」と、息巻いていた。沖縄から戻って来た彼女の一人娘も、「私のときも」と頷いた。教会にはもう十四年も出席していないが、クリスチャンの自覚を失っていない。
　今日の葬式となった三女は、私が十七、八年前から家を訪ね、ゆっくり伝道していたのだが、家族関係もあり、なかなかクリスチャンになると言わなかった。しかし、父と母が同時に洗礼を受け、家族でキリスト教式の葬儀を行ったことで、すっかり心を入れ替え入信の決

意をした。召される前の一週間は、病院で一緒に聖書を読み、聖歌を歌い、お祈りをしていたと、長女と沖縄の娘が大胆に証をしていた。

〇〇年〇月〇日

長女、つまり最初に亡くなった男の子の祖母が教会に来た。滅多に来られないので、みんな大喜びである。彼女は子供のころ、ゴエモン風呂の蓋の上で遊んでいて熱湯の中に落ちて、全身大やけどをしたのを始め、肉体的苦難の連続であった。その後もいくつもの難病を経験して、高校二年生のころ異変を感じていた病気は、卒業後に膠原病と判明した。結婚はだめと言われても結婚した。出産はだめと言われていながら、決死の覚悟で出産した。膠原病で入院したときは十一人が同じ病気で入院していたが、最期の生き残りの片割れは十二年前に亡くなって、今は彼女一人である。

牧師が彼女に伝道し始めて、もう二十七年になる。初めは子宮頸癌、それからありとあらゆる病気をした。癌はほかに二つくらいした。院内感染で死にかけもした。しかし、精神病院の看護士をしながら、しぶとく、力強く、そして明るく生きて来た。彼女はほとんど薬が使えない。三十六もの病名が出されている体には、どれも副作用が怖くて使用出来ない。彼女とは平気で病気の事、死のことを話し合える。背が高いのに今は痩せて三十キロ代だろう。両手の指は折れ曲がった木の根のように変形して動かず、節々には大きなこぶができている。両腕の肘にもジャガイモ大のこぶがある。両ひざはいく度も水を抜いた後で痛々しい。実際に、毎日表現できないほどの酷い痛みに耐えているらしい。今は立って歩くのも困難で、車いすを用いている。でも、今日は自分で身障者用の車を運転して来た。召された父と一緒に洗礼を受けた母が、熱中症気味で動けないので、車いすを車に乗せる者がいなくて使えない。降りるときに助けが必要だと、信徒が迎えに出た。

彼女の信仰は「ものすごく」気高い。聖書の知識はあまりない。教会のこともあまり知らない。彼女は目が弱く聖書を読むのは困難であるうえ、教会出席も難しい。訪問して話すにも、病弱の上に老齢で、自分ではほとんど何もできないのに、口やかましい義母がいるため、それができない。でも、神様に似せて造られた彼女の中にある、人間としての本性が、彼女の創造者に対する信仰と共に強められ、私が今までに出会ったどんなクリスチャンにもまして、神様に信頼している。自分の苦しみは、他の人への励ましとなり、信仰への導きとなるためである。そのためなら最後の最後まで、どれほど大きな痛みを与えられても、感謝と喜びを持って生きて行けると、証をしている。本当にそうだと思う。今日は香港から来たクリスチャンテレビ局の人たちが、彼女にインタビューをしていた。彼女の信仰態度に、さすがに驚いた様子であった。

「先生。沖縄の娘がね。以前、ここに出席していたフィリピン人の女の子に連れられて、向うで英語の教会に行ってるんですって。しかも、いくつもの教会に出入りしているらしいんです。とても熱心になって、聖書も、四種類も買ったって。」 嬉しそうに話してくれた。

「ああ、あのフィリピン人なら、しっかりしたクリスチャンだから信頼できるよ。励まして

あげるんだね」と私。

〇〇年〇月〇日

二十三年以上指導してきた兄弟が、突然召された。彼の携帯に入っていた最初の名前が私だったということで、ICU に入れられたとき、看護士が私に最初に電話を掛けて来た。私はすぐに彼のフィアンセに連絡を入れ、病院で落ち合った。血の繋がっていない兄弟も遅れて到着した。三時すぎまで元気に会話していたフィアンセは、三時間後には彼の遺体と面会ということになった。

この兄弟は大学卒業後、関東にある有名な観光バス会社に就職し、会社の研修員のひとりとして、イギリスのホテルに長期の派遣をされていたという。ところが休暇で帰国中、体の具合がおかしいと東大病院で診てもらったところ、筋ジストロフィーと診断されたのだそうだ。それで、故郷に近い町の国立病院にこの病気の病棟があるからと、私の隣町の病院に入院していた。車いすの生活で、当然、気難しい性格になっていたけれど、しばらくたってクリスチャンとなり、だいぶ穏やかな人間になった。

コンピュータで心の行動範囲を広げるように、町役場に交渉して無料でコンピュータを入手できるようにしてあげると、もともと得意だった英語を用い、世界と交流ができるようになった。十年以上も経ったある日、自分がかつて務めていた会社のブログを開くと、一緒にイギリスへ行ったもう一人の研修員が、新しい社長になっていた。連絡すると彼のおかげで、会社の保険がおりるようになったと喜んでいた。

ずいぶん色々なことがあったが、病状は確実に悪化し、車いすもコンピュータも使えなくなった。でも彼の心意気は健康だった。ある日私は、「〇〇さん、結婚はしたくない？　いいもんだよ。この世に生まれてきたら、やっぱり結婚はしたほうが良いな」と、半分冗談で言った。「そうですね。機会があれば、ぜひそうしたいですね。」　彼も笑いながら答えた。

それから更に病状は悪化し、施設に入って、何もかも介護士のお世話になるようになった。そこに新しい女性の介護士がきた。彼によると、「一目見てこの女性と結婚するんだ」と思ったのだそうだ。彼女は四十歳を超えたばかり、彼は六二歳だったろうか。離婚歴と二人の男の子があるとはいえ、彼女は上向きにベッドに横たわるだけの男性の、結婚の申し込みを快諾したのである。紆余曲折があった。施設の上層部が強烈に反対したために、なかなか結婚の日取りを決められなかった。でも不思議なことに、離島に住む彼女の母も、電話で彼と話してみて、結婚に大賛成してくれた。二人の子どもも賛成してくれた。私たちは、結婚式のことを話し合っていた。

彼の体は日に日に弱り、食べ物も充分に取れない状態が続いて、また入院した。新婚生活のために、病院の近くに私が見つけ、手配して上げたアパートも、引っ越すのが無理になった。やがて、体の中で動く部分は口と目だけになった。木の板に取り付けて手のひらに貼り付けた、呼び鈴のボタンも押せなくなった。でも、彼と彼女は幸せで、結婚の日を待ち望んでいた。よく彼を見舞っていた信徒たちは、みな、驚くというか、あきれるというか、唖然

とするというか、もう、何がどうなったのか分からない。とにかく喜んであげる以外になかった。
　そんな中、彼は突然召された。心臓がもう耐えられない状態だったらしい。彼の場合も、複雑な親戚関係があって、葬式は仏式で行った。駆けつけて来た血のつながらない兄が、私に気兼ねして、一言「すみません」と言って、頭を下げた。私は「かまいませんよ。どのような葬式であっても、彼が天の御国へ行くのは変わりませんから。彼も自分の葬式を、何式でやるべきかなどと混乱するのは、嫌でしょうから」と答えた。これからどんな争い事が起こるかと、はらはらしていた人たちは胸をなでおろした。

〇〇年〇月〇日
「お墓参りに行ってきました。もう三周忌です。」今は看護士免許も取ろうとしているフィアンセが、お墓参りのついでに我が家に立ち寄った。ここからは車で一時間半ほどもかかる町の、看護学校に学んでいるため滅多に教会には来られない。でも。心は婚約者と同じ宗教を受け入れたと、クリスチャンになったつもりでいる。
　彼のことについて、またいろいろ話をしているうちに、「あと何年かすると、私も彼のところに行きますし、寂しくありません。こちらで結婚できなかったから、向うできちっと素敵な結婚式をあげて見せます」と、明るく、転げるように笑いながらおっしゃる。
　彼女が帰ってから、家内と話し合う。「向こうでは、もう結婚はないということ・・・、言わないでおきましょう。」「今のところは、騙しておいた方が良さそうだね。」

〇〇年〇月〇日
　K 子さんが召された。私が病院で伝道を始めておよそ一年半。五十を超えたばかりである。はじめはキリスト教の牧師と聞いて、警戒しているようであった。でも、「私はキリスト教の神様のお話はしません。あなたが日本人の一人として、多分、子どものころから、心の奥深くで感じていた、大きく優しく、強く、正しく、恵み深いお方、良い人にも悪い人にも太陽を昇らせ、雨を降らせてくださるお方について、お話ししたいと思ってお伺いいたしました。私たち日本人は、時折、命を与えられていることに、感謝の気持ちを抱きます。生かしてくださっている方がいらっしゃると感じます。そのお方についてお話ししたいのです」と言って、改めて自己紹介をした。
　彼女に会ったのは、保険の外交員をしている我が教会の信徒の願いを聞いたからである。「私の担当の人の中に、いま、もう死にそうで、とっても惨めな心の状態の女性がいますので、先生、ぜひ訪ねてお話ししてください」と言う。「どうして自分でお話しして上げることが出来ないの？！」と、彼女を叱ったものの、そこまで指導ができなかった自分を恥じて、結局、訪問した。
　彼女は、自分が幼いころから感じていた、目にも見えず、手で触れることもできないけれど、優しく、恵み深く、自分を生かし、養ってくださっている方を、聖書が教える天地の創

造者と同じ方であると、半年もしないうちに固く信じるようになった。そしてこのお方を天のお父様と呼び、感謝と賛美と祈りを捧げるようになった。彼女の表情に微かな変化を見て取った。

そうしているうちに、「自分のような穢れた人間が、この大きく聖いお方の前に平気で出られるはずがない」と言い出した。「しめた」と思って、私は、「本当は人間というものはみな汚れていて、絶対に聖いこのお方の前に出ることは、決してできないのだけれど、このお方が、私たちのためにその問題のすべてを解決して下さったのです。だから今、私たちが自由にこのお方の前に出て、図々しくお祈りもできるようにされているんですよ」と、イエス様の十字架の贖いについてお話しして上げた。それからの彼女は、「イエス様のお名前によって祈ります」という言葉の意味を、よく理解して祈るようになった。そしてこのときから、彼女の生活はまさに一変した。ベッドの上から一歩も動けない状態は同じであったが、暗く沈んだ顔が急に明るくなって、笑顔がこぼれるようになった。ため息と、独り言のような愚痴ばかりが口を突いていたのが、「有難うございます。お世話になりますね」という、感謝の言葉に代わったのだ。忙しくて一週間に一度しか会いに来られないご主人も、彼女の変化に気付き、驚いておられた。何度も「有難うございます。有難うございます」と、私に頭を下げた。

彼女はとうとう一度も教会の集まりには出席できなかった。立った姿も見たことがなかった。信徒たちの数人が時折彼女を訪ね、励ましてあげただけだ。でも、彼女を励ましに行った信徒たちは、みな、反対に励まされて帰ってきた。

昨日の通夜も、今日の葬式も嗚咽の声が絶えなかった。知らなかったのだが、彼女はとても多くの人たちに慕われ、惜しまれていたようである。

〇〇年〇月〇日

保険の外交員の信徒が、K 子さんのご主人に呼び出された。彼女は K 子さんが亡くなられて一年以上になるのだからと、ご主人にお見合いを勧めていたようである。それで彼女は、良く知っている女性でご主人と死別され、今は一人で暮らしている素敵な方を伴って、K 子さんのご主人の家を訪ねたのだそうだ。

ところが、呼び出されたのは保険のことだったので、連れて行った女性も、急遽保険関係の人ということに変えて・・・・もちろん今は一人で暮らしているという、肝心なところはしっかりと伝えて・・・・亡くなった K 子さんの思い出話に移ったのだそうだ。彼女がどのようにしてクリスチャンになり、どう変わったかなどをお話ししているうちに、ご主人は、「そうでしたか。それで分かりました。K 子が余りにも突然明るく変わってしまったので、本当に驚いていたのです。クリスチャンになったということは、本人から聞いていましたが、そういうことだったんですか・・・・・」と、涙をポロポロではなく、ボロボロ流して顔をくちゃくちゃにして、大声で泣き、なにも言えなくなってしまったそうだ。一緒に連れて行った女性は、それを見て、「これでは、再婚の話はまだまだ駄目だ」と、悟ったということ

である。
「諦めないで、うまく続けてください。私たちは時折、週報などを届けて伝道を続けていますから。そうそう K 子さんは、『自分がいなくなったら、残されるご主人には早くいい人が見つかるように』って、祈っておられてことも、いつかお話しして上げてください。」 私は福音を語ることが下手な信徒が、いつの間にか、美しくも可愛らしい「世話焼きおばさん」に変化しつつある姿に、こみ上げてくるおかしさを隠して言った。